

センチメンタル・ネイ ビー

しやりくら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦娘たちの切ない／悲しい物語を切り取っていく短編集

一話完結のため、気になるものからどうぞ

目次

Г о р е н е м о р е , в ы п ь	1
е ш ь д о д н а	6
帝都の桜	21
波濤をこえて	28
ブルーストの墓守	33
墨塗りの戦場	42
ブリーズ・イズ・ナイス	58
アイスクリーム・ストロベリー	71
ミル・マイ・ハート	83
夜鷹の明日	88
私の夜戦	88
提督、あなただとわからなかった	

Г о р е н е м о р е ,
В ы п ь е ш ь
Д о
Д н а

ロシア

よく知っているようで、あまり知らない国。

白い雪の向こうにまどろむ、灰色の国。

いま、私の目の前に差し出された手紙には、小さなロシア語のスタンプと、私を試すかのようにこちらを見つめる双頭の鷲が刻まれていた。

「響、ちよつといいか」

そう呼ばれて振り返る。

この人はこの鎮守府の司令官。

この国の海軍の中枢を担う人物の一人であることを、彼が身にまとう純白がよく表している。

彼は海の男にしては優しい顔立ちをしていて、しかしその声は、彼が荒波に揉まれてきた人間にふさわしく、堂々と力強いものだった。

「どうしたんだい、司令官」

「少し、大事な話があるんだ。ここじゃちよつとなんだし、俺の部屋まで来てくれないか」

大事な話？

大規模作戦はこのあいだ終結したばかりだし、資材の備蓄も十分だ。

春の陽気も相まって、鎮守府はいま、久々におだやかな空気に包まれていた。

そのなかでの「大事な話」

疑問符を浮かべながらも、私は「了解したよ」と短く言葉を返した。

久々に訪れた司令官の部屋は、私が着任した時とほとんど変わっていなかった。

綺麗に整理された書棚や、これまでの彼の活躍を示すきらびやかな勲章たち。

華美な装飾もなく隅々まで清掃の行き届いたこの部屋は、司令官の性格そのもののよう
うで、ほとんど訪れることこそないものの、私にとつても好ましいものだった。

しかし、部屋の奥に置かれた執務机のうえには、見慣れない、真つ赤な手紙が置かれていた。

自然、落ち着いた色に染められたこの部屋に似つかわしくない、いささか主張のすぎる封筒に、私の目は引き寄せられる。

司令官もそんな私に気づいたのだろう。

これといった前置きをすることもなく「君宛に今朝、大本營から送られて来たものだ」と言いながら、私にそれを差し出した。

Военно—морской флот

かつて、鋼鉄の身を捧げ、私が忠誠を誓った名がそこにはあった。

封は既に切られてあつたから、司令官はもう中身を知っているのだろう。

わざわざ開かずとも、これになにが書いてあるのかくらい、私にはもうわかっている。それはきつと、かつて「響」という艦がたどつた旅路への招待で。

その旅路は、たった一枚の片道切符が導くもので。

艦娘としての直感と、そしてなによりも、いま私にそれを差し出した手の震えがそれを物語っていた。

「……読まなくてもわかるさ」

「……なに？」

「私は、行かなくちやいけないんだろう？」

「もう……知っていたのか……」

「別に知ってたわけじゃないさ。封筒の送り主と、双頭の鷲。そしてなにより、司令官の手が震えていた」

「そこまで見られているとは思わなかったよ。提督冥利に尽きるね」

そう言つて、司令官は私に事の次第を語り始めた。

いま、北極海にまで深海棲艦の勢力が及んでいるということ。

その中でもロシアの占める海岸線は長く、必然的に大きな戦力が必要になるといふこと。

まだ北極海地域における海軍戦力の連携は十分とは言えず、満足いくほどの艦娘の戦力は揃っていないということ。

そして、ロシアの海軍戦力をリードし、ロシアを北極海戦線における戦力の要に導く役として、かつて賠償艦として引き取られた縁から、私に白羽の矢が立ったということ。

司令官がすべてを語り終える頃には、もう随分と日は傾いていた。

窓から差し込む夕日の最後の抵抗が、司令官の横顔を照らす。

食堂から漂うカレーの香りが、今日に限って印象深く、そういえば今日は金曜日だったなど、私はぼんやりと思ひ出した。

言葉が行き場を見つける頃には、司令官の頬には一筋、伝うものがあつて。

かつてわたしが、海の男とともに歌つたヴォルガ川は、きつとこんな風に大きく、優しさに満ちていたのだろう。

それが決して、夕日のせいでないことは。そして、夕日のせいにしなくちゃいけない

いつてことは。私には痛いほどわかった。

扉に鍵をかけ、私は静かに司令官を抱きとめた。一瞬遅れて、背中に体温が触れる。海の男の両の手は、私を決して離すまいとしながらも、優しく私の錨を上げる。

私たちは多くを語ってはこなかった。

そして、夜が明ければきつと、私たちはもう語る言葉を持たないだろう。

これからは、波音だけが私とあなたを繋いでいく。

でも、悲しみは海ではないから、きつと飲み干してしまえるだろう。

そうして、私たちは、黄昏時に別れを告げた。

櫂の音だけが、いつまでも静かに響いていた。

帝都の桜

ここ、海軍兵学校の隣には、もうひとつの海軍の教育機関がある。

その名は「海軍特別術科学校」

その役目は、海軍兵学校を卒業した若き士官たちのなかから、艦娘を前線で率いて戦う「提督」を選出し、育成することにある。

この学校に踏み入ることを許されるのは、提督としての資格を持つ者だけであり、それゆえ、かなり謎に包まれた世界と言えるだろう。

さて、この学校の庭には「連理の桜」と呼ばれる、まこと不思議な桜が植えられている。

何が不思議かというと、その桜は別々の二本の木が繋がり、もはや一本の大木となっているのである。

おまけに、その桜が花を散らしたところを見たものはおらず、この桜は年中咲き続けている。

この連理の桜を知らぬ提督はいないだろうし、また、この桜を知る艦娘もいないだろう。

それというのも、この学校に入校した未来の提督たちはまずこの桜の前で訓示を受け、提督としての決意を新たにする。

そして、この学校を後にしてからは、この桜に誓った思いをただ自分一人の胸に秘めて、提督の任につくことになるからである。

この桜の木の下には、名もなき一人の海軍士官と、ある一人の艦娘の物語が埋まっている。

これは、艦娘とともに命を賭して戦う提督のすべてが知りながら、決して誰にも語らない物語である。

時は昭和。大恐慌を乗り越え、軍靴の足音が近づきつつある未明の時。

嵐を超えて束の間の安寧を手にした帝都は、これから自らに降りかかるであろう火の雨など知る由もなく。

淡々とした日常の中で、静かに朝を待っていた。

しかし、眠っているはずの帝都に灯りが一つ。ある立派な屋敷の小さな窓から零れ落ちていた。

耳を澄ませてみれば、万年筆が紙の上を滑る音がする。

部屋の主は、勉強に勤しむ学生か、それとも熱心な作家か。

残念ながらどちらでもない。この部屋に住む少女は、手紙を書いていたのである。

「親愛なる——さんへ

ついに兵学校の合格が決まったのね！本当におめでとう！

自分のペンパルが未来の海軍士官になるなんて、とても信じられないわ。

あなたと実際にお会いしたことはないけれど、兵学校に合格するなんて、きつと素敵な方なのね……

あらいやだ。あなたがとても素晴らしい殿方だつてことは、文通していればわかることなの……

ごめんなさいね。変なこと言っちゃつて。

ああでも、あなたの軍服姿！一度でいいから見てみたいわ。

お父様はきつとこの帝都を離れることを許してくださいださらないだろうけど、それでも、ほんの一瞬でもいいから見てみたい。

純白の軍服に身を包んで、艦隊指揮をとる凛々しい姿。どうして私は海軍に入れないのかしら！

お父様はいつもいつも、お前が男だつたらいいのにとボヤいてばかり。

私だつて、入れるものなら入りたかつたわ！

あなたが艦隊を指揮して、私は水雷長として、必中必殺の魚雷を撃つの。

(ああ、なんで水雷長なのかってあなたは思うかしら。私のお父様はいま海軍省でデスク・ワークだけど、艦に乗っていた頃は水雷長だったの。兄も水雷屋だし、血は争えないのかしらね)

そんな想像ばかりしてしまって、近頃は女学校の「お稽古」も身に入らないわ。

いつか、お父様の目を盗んで私も江田島に行くわ。その時は白手袋で、私をエスコートしてくださいね。

きつと、きつと、約束よ。

帝都より、愛をこめて

——より」

少女は丁寧に手紙を封筒に入れ、熱い蠟で火傷をしないように慎重に封をした。

帝都の外を知らない彼女にとって、この書簡だけが帝都の外と彼女をつなぐパスポートだった。

書棚の奥にしまわれた箱に詰まった、ペンパルからの手紙。それはどんな財宝よりも、彼女にとっては価値あるものだったのである。

数ヶ月が過ぎた頃。帝都の大通りをひた走る、一人の女学生の姿があった。

その少女は待ちきれないといった表情を浮かべており、桃色の袴を両手でつまみ上げながら駆ける姿は、多くの通行人たちの目に非常に奇異なものに映っただろう。

はたして、彼女は郵便局の前で止まり、はずむ息を抑えながら、重厚なマホガニーの扉を勢いよく開いた。

爆弾で吹き飛ばされたかのような音が玄関ホールに響き、訪れていた市民たちは何事かと振り返る。

しかし、そこで働く局員たちは慣れたもので、むしろ今日に限っては何かを祝福するような表情をしている。

少女は紅潮した頬を隠そうともせず、郵便局員から手紙を受け取ると、勢いよく封を切って読み始めた……

「親愛なる——さんへ

まずは、返信が遅れてしまったことをお詫びさせていたいただきたい。

それというのも、貴方からの手紙を読んだ途端、私の身体全体に電撃が走り、何を書いたら良いものか、とんとわからなくなってしまったのです。

きつと貴方は私の兵学校合格を喜んでくれるだろうと思っていました。まさか故郷

の誰よりも祝福していただけるとは思いもありませんでした。

私は貴方の顔を知りませんが、しかし、どんな表情で文を綴っていたのかは、手に取るようにわかりました……

いま私は、江田島に旅立つ準備を終え、故郷の最後の月明かりの下で、この手紙を書いています。

江田島にいけば、数年間娑婆婆気の無い環境に身を置くこととなります。

当然、貴方に手紙を送ることもできなくなるでしょう……

でも、悲しまないでください。皇国の四方を守る防人となるために、これは必要な時間なのです。

いつの日か、また便りを送ります。

どうかそれまで、貴方の心が変わらずにいれば……

帝都の桜の木の下に、きっと貴方を迎えに行きます。

変わらぬ愛を込めて

——より」

桜の花が散っては咲き、咲いては散った。季節が何度か巡っても、帝都の春は、少女が小さな窓から見つめてきたそれと何も変わらないかのように見えた。

だが、帝都に流れた時間は、少女を大人にするのには十分すぎるものだった。

桃色の袴も、ざくろ色の髪に映える山吹のリボンも、もう彼女の一部分ではない。

とはいっても、彼女が万年筆を滑らせるその音だけは、たしかに少女のままだった。

「私のかげがえのない——さんへ

無事に卒業したのね！おめでとー！

数年ぶりの便りは、海軍士官にふさわしい精悍な顔つきで書いていることが伝わってくるようでした。

今のあなたは遠洋航海で太平洋の上かしら。それとも倫敦^{ロンドン}？いえ、地中海だったりするのかしら。

きつとあなたは、私の知らない外国でこの手紙を受け取って驚いていることでしょう。あなたの帰国が待ちきれなくて、お父様の海軍の友人の方に無理を言ってお願ひしたの。

だつてなによりも、あなたを祝福したくて。

！
本当はこんな手紙なんかじゃなく、あなたのもとに飛んで行って抱きしめたいくらい

！
帰国したら、一番に帝都に迎えにきて、そして、どこか二人つきりで外国の見聞を話

してください。

それまでに私、もつともつと、素敵な女性になっておくから。お願いね。でも、もしかしたら私たちはもつと早く会うことになるかもしれないわ。

本当は桜の木まで内緒にしておくつもりだったけど……私、海軍に入ることが決まったの！

ああ、言っちゃった！あなたの驚く顔が見たくて秘めておくつもりだったのに、待てなかつたわ！

少人数の女性だけでつくられる部隊らしくて……お父様の勧めもあつて、そこに入ることになったの！

お父様はなんだかちよつと複雑そうな顔してたけど……きつと愛娘が離れていくのが寂しいんだと思う。

栄光ある帝国海軍初の女性士官として、これからはあなたと一緒に戦える。これ以上誇らしいことはないわ。

次に会うのは軍艦の士官室か、それとも帝都の桜の木の下のかはわからないけれど……絶対に迎えにきてね。

私、ずっと待ってるから。

この上ない愛と祝福をこめて

——より」

軍靴の足音はすぐそこまで迫っていた。

帝都の空気は張り詰め、それでいて、なにかを期待するような奇妙な熱気が大衆の間に広まっていた。

いよいよ開戦は不可避のものとなった頃、日米の国力の差を誰よりもよく知る帝国海軍は開戦に先駆け、ある一つの極秘部隊を編成することを計画した。

その計画の名は「風号計画」

その計画の詳細は、残念ながら明らかになっていない。戦後の東京裁判を目前にした海軍上層部が焼き払ったとも、海軍省の庁舎が取り壊される際に失われたとも。

はたまた、自らの保身のために、極秘裏に連合国に引き渡されたとも言われているが、一つ言えるのは、その計画の全貌を明らかにする資料は現存しておらず、また、ただ一人の証人も残ってはいないということだけなのである。

しかし、この部隊に所属したある士官の書簡が近年になって発見・復元され、その概要を掴むことができた。

そして、何の因果だろうか。その書簡が発見されたのは、深海棲艦が現れ、瞬く間に人類の脅威となった時期と。復元・解読に成功したのは、どこからともなく艦娘が現れ、

人類とともに戦い始めた時期と重なるのである。

そう、「風号計画」とは「女性の身体に艦の記憶を定着させ、一隻の軍艦に匹敵する人間兵器を生み出す」計画。

そして、その風号計画によって生まれた極秘部隊の中核をなす存在は「神風」と名付けられた。

帝都の屋敷の小さな部屋で手紙を綴っていた少女の、もうひとつの名である。

海軍工廠の、遙か地底深くに隠された区画の一室。

いや。むき出しのコンクリートの壁に、清潔すぎるリノリウムの床。そしてステンレス鋼の鈍い光沢だけが彩りを添えるこの部屋を、はたして部屋と称して良いものだろうか。

すくなくとも、この部屋がうら若き女性のものであることに気づける者はいないだろう。

しかし、もはや「人間」ではなくなったこの部屋の主にとって、部屋の装飾など大した問題ではなかった。

部屋の中心にぽつんと置かれた、味気ない灰色の事務机。この机と粗末なパイプベッドのほかには家具はなく、時計の針の音すらしない部屋で、唯一空気を揺らすのは、あ

頃と変わらない万年筆のペン先だけだった。

「私の愛する——さんへ」

いよいよ私たちの晴れ舞台がやってきましたね。あなたはいま、南方で戦っていると聞いています。

私は本土防衛の要として、いまはまだ待機せよとのことだけど、本当は前線に出たくて居ても立つてもいられない。

戦況はかなり好調だと聞いています。あなたもきつと、大いに戦果を挙げているのでしようね。

あなたの活躍がきつと皇国に栄光をもたらし、沈めた敵の数だけ、海に平和が取り戻されていくのでしょうか。

南方の海は碧く透き通っていて、まるで天国のような場所だと聞いています。

白波をあげて、敵艦に向かって勇往邁進するあなた。

戦線が本土から遠ざかれば、私も一緒に出撃できるかしら。

戦いが一息ついたら、きつと便りをくださいね。

もしかしたら、南方の海か、それとも……帝都の桜の木の下で、言葉を交わす方が、先になつてしまうかもしれないけれど。

私、ずっとずっと待っています。

ご武運を。

比翼の鳥に願いをこめて

——より」

これが現存している最後の書簡となった。本当はもつと多く書き綴られたのだろうが、これより先の書簡は発見されておらず、また、この封筒に消印はなかった。

軍靴の足音は途絶え、軍歌のマーチが洋上に響く事はなくなつた。

海軍はすべて解体され、青い海の奥底に眠る黒い鉄塊は、多くの人々の記憶の中で錆びつき、風化していった。

しかし、かつて帝都とよばれた場所の桜の木の下に、いつも佇む一人の青年の姿があった。

雨の日も、風の日も。春が巡って、夏が過ぎ。雪が舞つては桜が散つた。

それでも青年は、何かを待っていた。

しなやかな黒髪が白髪になつても、彼は桜の木の下で待ち続けていた。

いよいよ命の灯火が消えかかろうとする頃、深海棲艦が現れた。

彼は何かに導かれるように、かつて海軍工廠と呼ばれた場所に赴いた。

そこで彼はある一つの古びた箱を見つける。

そのなかには彼が、命を賭して守ろうとした、そして、帝都の桜の木の下で待ち続けた思いが詰まっていた。

彼は手紙の全てを復元・解読し、彼女の身に起こったことの全貌を知った。

そして同じ頃、洋上で一人の少女が発見される。

桃色の袴に、ざくろ色の髪。そして、髪飾りとして山吹のリボン……

人類は艦娘とともに立ち上がり、深海棲艦の脅威に立ち向かう存在として「海軍」が組織された。

初代提督とその秘書艦の二人は、海軍の再組織に多くの貢献を果たした英雄とされている。秘書艦は人類によって初めて発見された艦娘がつとめた。

その名を「神風」という。

初代提督の名は明らかになってはいない。だが、彼の筆跡は、ある書簡のそれと同じものだといわれている……

ここ、海軍兵学校の隣には、もうひとつの海軍の教育機関がある。

その名は「海軍特別術科学校」

その役目は、海軍兵学校を卒業した若き士官たちのなかから、艦娘を前線で率いて戦う「提督」を選出し、育成することにある。

この学校に踏み入ることを許されるのは、提督としての資格を持つ者だけであり、それゆえ、かなり謎に包まれた世界と言えるだろう。

さて、この学校の庭には「連理の桜」と呼ばれる、まこと不思議な桜が植えられている。

何が不思議かというと、その桜は別々の二本の木が繋がり、もはや一本の大木となっているのである。

おまけに、その桜が花を散らしたところを見たものはおらず、この桜は年中咲き続けていた。

この連理の桜を知らぬ提督はいないだろうし、また、この桜を知る艦娘もいないだろう。

それというのも、この学校に入校した未来の提督たちはまずこの桜の前で訓示を受け、提督としての決意を新たにす。

そして、この学校を後にしてからは、この桜に誓った思いをただ自分一人の胸に秘めて、提督の任につくことになるからである。

この桜の木の下には、名もなき一人の提督と、ある一人の艦娘が眠っている。

一人の提督が、帝都の桜の木の下で、一人の艦娘を待ち続けた。

帝都の桜は決して枯れず、その連理の枝は、決してその花を散らさない。

桜への誓いを忘れぬ限り、艦娘の前に神風を吹かせ、すべてを薙ぎ払ってくれるだろう。

波濤をこえて

「ここから眺める海もなかなか素敵ネ。デツキがひらけてる分、ちよつと風が強いけど……潮風が気持ちいいワ」

「そうですね。しかし、自分と同じ名前を持つ艦の甲板から海を見るとするのは不思議なものです」

舳先がしぶきをあげて波を砕く。

門出を祝福するかのように、海は鈍色の「わたし」にきらめきを添える。

水平線の彼方で何かが跳ねた。トビウオだろうか。

跳ねては潜り、またすぐ跳ねる。

なぜすぐ沈むのに飛び立とうとするのか。

私にはどうしても、トビウオの気持ちちが理解できなかつた。

その日、私は観艦式に参加していた。

もつとも、観艦式とはいっても、艦娘としてではなく来賓としての参加だ。

今回新しく就役する護衛艦の名前は「かが」というそうで、同じ名前を持つ私に招待

がかかったのである。

私の隣ですこし眩しそうに目を細めるのは金剛。

彼女もまた、護衛艦「こんごう」の縁で、私と同じように招待されている。

いずも型護衛艦かが。

私と同じ全通甲板を持つ、ヘリコプター搭載護衛艦。

私は飛行機で、この子はヘリコプター。

物は違えど、空に飛び立たせるといふ役割に変わりはない。

この子が私と同じ名前を受け継いだのは、はたして偶然なんだろうか。

艦娘の身で、自らの名を冠する艦に乗る日が来るとは思いもしなかった。

この「かが」は、私にとって娘みたいなものなんだろうか。

少なくとも、私にはそう感じられてしまう。

だからこそ私は思う。

ミッドウエーの無念を、この子には継がせたくはなかった。

私の慢心を、この子には知って欲しくなかった。

……私は、自分の娘に「戦い」を知って欲しくはなかった。

「また難しいコトを考えてるネ、加賀」

のんびりしているようで芯の通った声が、私の意識を引き戻す。

「眉間にシワが寄ってるヨ。せつかくの観艦式なんだから、もつとhappyな顔しないとダメダメ」

やっぱり、この人にはわかってしまう。

赤城さんとこの人にだけは、私は隠し事をする事ができない。

……あと、五航戦のあの子にも。

「なんとなく加賀の考えてるコトはわかりますヨ。多分それは、一人の女性である前に、一隻の空母だから抱く感情デス。違いますか？」

よわった。

まさかここまで見抜かれているとは思わなかった。

いくら付き合いの長い赤城さんでも、きつとここまでは見抜けなかっただろう。

もつとも、赤城さんは強い人だから、こんな感情を抱くことはないのかもしれないけれど。

一呼吸おいて言葉を返す。

波の音が遠く聞こえ、しかし、金剛がしっかりと耳を傾けてくれていることだけは、なんとなくわかった。

「金剛。私は、弱い艦娘でしょうか。艦載機こどもたちを飛び立たせ、帰ってくるときに迎える存

在。それが航空母艦、空母です。しかし、飛び立つ先は戦場。もちろん、帰ってくることのできない子もいます」

どうしてしまったのだろう。

今日に限ってやけに饒舌な私がいる。

「私とあの子達は一心同体。あの子達が戦果に酔えばそれが私に伝わるし、あの子達が波間に消えれば、息が詰まっていくその感触すら、私にはわかる」

決死の覚悟を決めたプロペラのように、私の口は止まらない。

「我が子を戦場に送り出す痛み。その痛みが私を蝕みます。そして、いま私は、自分の分身であり、娘ともいえる存在の誕生に立ち会っている。この子もいつか、護衛艦として戦場に向かう時がくるかもしれない。遠い戦場で沈むかもしれない。消えない炎の中で、暗く冷たい海の底に」

体が熱い。息が苦しい。とても立ってはいられない。

それでも、私の口は止まらない。

「私はあと何回、子供達の死を見届けなければならないのでしょうか。私がまだ鋼鉄の身だった頃、私の甲板の上で、たくさんの子が語らっていました。故郷を懐かしく語るその多くは、ついに再び祖国の土を踏むことはなかった。一航戦の名に自惚れた私は、子供達の帰る場所を奪ってしまっただけ……」

不意に、何かが私の身体を支えた。

麻痺した頭は、オーバーヒートした栄のように熱かった。

すこし遅れて、私は倒れそうになり、それを金剛が支えたのだと気づいた。

「加賀。まずは落ち着いて。ゆっくりと深呼吸よ」

言われるがままに息を吸いこむ。

慣れ親しんだ潮の香りが私の肺を満たす。

柔らかな栗色の髪が、風に吹かれて私の首筋を撫でる。

「加賀。あなたは自分で思っているほど弱い艦娘なんかじゃないわ。戦場に身を投じながら、我が子の身を案じる。それができるあなたを、誰も弱いなんて言わないし、言わせない。あなたは一航戦の加賀。自信を持ちなさい」

久しぶりに聞く、金剛の真剣な声。

強さと優しさに満ちたこの声が、私はなによりも好きだった。

それをいまさらになつて思い出す。

「我が子を戦場に送り出す痛みは、戦艦の私にはわからない。でもね、加賀。護衛艦の『わたし』の誕生を見た時、私はなによりも嬉しかった。それが娘を思う気持ちかはわからないけれど……戦場に送り出す痛み以上に、誕生を祝う気持ちの方が強かったわ」

この人はいつもこうだ。

能天気なようで、誰よりも思慮深い。

艦隊の殿で皆を見つめ、ひとりひとりの痛みを背負う。

どんなに苦しい戦局であっても、檄を飛ばし、鼓舞する。

「あの子達が戦場に行くことになるかどうかはわからない。私たちと同じように、戦うために生まれてきた存在。もしその時がくれば、あの子達はきつと勇敢に戦うでしょう。でも、一番大事なのは、その時が来ないように祈り、行動することなんじゃないかしら」

赤城さんに先を越され、二航戦がすぐ後ろに迫り、五航戦が戦果を挙げ始めた頃。

焦りに吞まれそうだった私を、こうやって励ましてくれた。

あの頃飲み慣れなかった紅茶の香りを、穏やかな潮風が甲板に運ぶ。

「私たちがこの子達のためにできるのは、ただ門出を祝うことだけ。だったら、真剣に祝ってあげなきゃ駄目。この子達の気持ちになによりわかるのは、同じ名前を持つ私達だけなんだから」

一度、言葉を切る。

それにね、と言葉が続く。

「この子達は『護衛』艦。そして、私の娘はイージス、あらゆる邪悪をはらう盾。あの頃私たちが守れなかったものを、守りたかったものを、今度は必ず守るため。そのために

あの子達がいる、私達がいる。それって、とっても素敵なことなんじゃないかしら」
やっぱり、この人にはかなわない。

いつだって金剛は、私にとつての「イージス」だった。

どうしてこんな簡単なことを、今まで私は忘れてしまっていたのだろう。

水平線の彼方でトビウオが跳ねた。

さつきまでよりずっとたくさんのトビウオが、遠く遠くに飛んでいく。

どうか沈まないで、飛び続けてほしい。

たとえ鳥になれなくとも。水面にあらがい、波濤をこえて。銀の翼をきらめかせ。

澄み渡る蒼い空にどこまでも、あの子達の想いをのせて……

プルーストの墓守

「さて、どこから話そうか」

そう言つて、司令官は啞えた煙草に火を灯した。

かちやり、とライターの金属音が響く。

たちまち、ハイライトの独特なおいが執務室を満たした。

この人は、新しくここに配置された司令官だ。

ラバウル基地からこの呉鎮守府の司令に任命されたということだから、きつと前線で大戦果を挙げての栄転だろう。

実際、艦隊運用について、この人は歴代の呉鎮守府司令に勝るとも劣らない手腕をみせた。

あの加賀さんが素直に称賛したくらいである。

しかし、なぜだろうか。

輝かしい経歴を持ちながら、この人にはどこことなく影がある。

雰囲気がいけないわけではない。

むしろ、人格的にも優れ、常に前向きに艦娘を鼓舞する。完璧という言葉がこれ以上

ないほどに似合う人物だ。

だが、秘書艦を務めた艦娘は皆口を揃えて言うのだ。

司令官がサイドボードを見つめながら煙草を吸うとき、この上ないほど悲しい目をしていて、と。

呉鎮の艦娘たちの間では、もっぱらこの話で持ちきりだ。

今回はその理由を知るため、私、重巡青葉が艦娘たちの代表として司令官のもとに派遣されたのである。

「青葉。サイドボードの……上から二段目。あそこに並べてあるものがなにかわかるかいっ。」

そんなこと、わざわざ見るまでもない。

司令官がサイドボードを見つめるときは、決まってその上から二段目なのだから。

「香水……ですよね？ミニボトルがずらり。なぜ女物ばかりなのか気になっていましたか……。」

「そう、香水だ。だがね、僕にとって、これは墓標なのさ。」

「墓標？」

「……あの瓶にはね、かつて僕がラバウルで指揮し、散っていった艦娘たちが纏っていた

香りが詰まっているんだ」

そう言つて、司令官は煙を吐き出す。煙草の先端から、今にも灰がこぼれ落ちそうだ。

「青葉はラバウルの海の色を知っているかい？」

「まるで天国のように透き通つた青……そう聞いていますか」

「天国、か。それは半分正しくて、半分間違いだ。赤だよ、青葉。信じがたいことにね、赤く染まつているんだ。ラバウルの海は。深海棲艦と……それと同じくらいの数の、艦娘の血でね」

私は絶句した。ラバウルは激戦なれど、その戦果は上々。この呉にはいつもそんな電報が届けられていたからだ。

いや、戦果が上がっていたことに間違いはないだろう。

しかし、この呉とは違い、ラバウルは最前線。

大戦果は積み上がった屍の上にあつた、ということだ。

司令官の言葉が続く。

「そんなラバウルだ。皆、明日があるかわからない。だからかな。ラバウルでは皆、写真を撮ることを嫌がった。散つた自分が額縁の中で生き続ければ、それは仲間にとつて重荷となる。その重荷が、仲間の命を危うくする。皆、痛いほどそれをよくわかつていたんだ」

「でも、自分が、仲間が、短い間であったとしても、同じ時間を共にし、同じ飯を食らい、同じ戦場を駆けた。その証明が残らないのも、良しとはしなかった」

「そうしていつのまにか、皆香水を纏うようになった。香りを嗅いだ時に、香りを嗅いだ時だけ、お互いのことを思い出せるようにね」

からん、とロック・グラスが音を立てた。

司令官が落とした灰で、灰皿はいっぱいになってしまっている。

「人が一番に忘れるのは声だといわれている。そして、一番最後まで覚えているのは香りだそうだ。僕はいま、彼女たちの犠牲の上に戦果をあげて、こうして呉鎮守府司令の椅子におさまっている。人は僕を有能な指揮官と言ひ、呉への栄転も当然だと言う。だが、僕はそう思えなかった。僕は、拙い指揮によって多くの艦娘を沈めてしまった無能だ。いくらラバウルが激戦といつても、彼女たちに明日を教えてやれなかった。それだけは確かな事実なんだ」

今にも尽きそうな煙草を、司令官は灰皿に押し付ける。強く、強く。

「だから僕は、いまでもこうして彼女たちの香りが詰まった瓶を墓標としてるんだ。海に墓標はないからね……」

「もつとも、僕がもつとも愛した艦娘は、香りすら残してくれなかった。『残すまでもない。だって私は死なないから』なんて言つて。呆気なかった。基地が空襲を受けた日、

焼け跡に残っていたのは、彼女がいつもハイライトに火を灯していた、この小さなライターだけだったんだ」

氷がすっかり溶けてしまったロック・グラスに、司令官が手を伸ばす。

薄い縁に指が触れ、グラスはびしりと音を立てた。

私は、このひとがなぜこの呉鎮守府に送られたのか。

そして、こんなにも優れた艦隊指揮ができるのか。

その本当の理由を知ってしまった気がする。

彼のラバウルから呉への転属は一種の栄転であり、一種の左遷だったのだらうと私は思う。

彼はもう、戦場に立つべきでないのかもしれない。

それほどに、彼の一番柔らかい部分は、もう壊れてしまった。

彼はもはや、戦場の墓守として、死に場所を探しているだけなのだ。

くすんだ水色のパッケージから、一本。

慣れない手つきで私は火を灯す。

咳き込みそうになりながら、肺いっぱい煙を吸い込む。

吐き出した煙の向こうの、司令官の顔を見る勇氣は、まだない。

墨塗りの戦場

軍隊というものは、いつの時代も秘密が付き纏うものだ。

秘密の技術、秘密の部隊、秘密の作戦。

この帝国海軍にあっても、それは例外ではなかった。

もちろん、その秘密の中には、公になったものや、都市伝説に過ぎなかったもの、あるいはその罪を裁かれたもの、免れたもの、様々あるだろう。

今夜、ここに話す…というより、打ち明けるのは、いまだ公にならず、都市伝説ではなく、その罪を裁かれない秘密。

そういった類のものだ。

この物語が始まるのは、今から7年ほど前のこと。

人類と艦娘が邂逅し、瞬く間に海軍が組織され、人類が深海棲艦に対抗する手段をようやく得たという時期だ。

今でこそ艦娘を運用する海戦戦術は洗練され、定石をたどりさえすれば、妖精さんの加護を裏切ることさえしななければ、深海棲艦を撃破できるかはさておき、艦娘が撃沈さ

れることはなくなったといっても良いだろう。

しかし、あの頃はまだまだ艦娘や妖精さんに対しての理解は浅かったし、戦術は稚拙なものだった。

こうした事情から、海軍内は大いに荒れた。

その中心にあつたのは、「撃沈の恐怖から艦娘が逃亡し、戦力が失われ」「戦況がより有利な深海側に艦娘が寝返る」といった恐怖だった。

恐怖というものは、さらに大きな恐怖を呼ぶ。

自ら纏い、身を守るための恐怖だ。

そうして、諜報・督戦を主任務とする極秘部隊が設立された。

敵味方を問わず諜報活動を行い、逃亡や寝返りを企てる者を容赦無く抹殺するその名は「墨染部隊」。

墨染色の特別な制服を身に纏う彼女たちは、戦災孤児の中から選抜され、船霊を受け継いで艦娘となった存在。

彼女たちを突き動かすのは、自らを孤児にした深海棲艦への苛烈な憎悪と、自らを育てた「墨染提督」への病的なほどの忠誠心だけだった。

こうして生まれた墨染部隊は、精強無比な存在だった。

それこそ、それを生み出した海軍自身が手を焼くほどに。

とはいっても、彼女たちの「墨染提督」が手綱を握る限り、墨染部隊の運用には何も問題はなかった。

墨染部隊の戦いぶりは凄まじいものだった。

泣いて許しを請う駆逐艦を撃ち抜き、脳漿が波間に溶けるのを無表情で眺められるのは、おそらく彼女たちだけだっただろう。

墨染部隊を知る者のほとんどは、彼女たちを感情のないキリングマシーンと知っているが、それは違う。

彼女たちは墨染提督を愛する以外の欲求を持たず、墨染提督の期待に応えようとして
いるだけ。

故に、彼女たちに不可能はなかったのだ。墨染提督が望む限り。

彼女らは、墨染提督の前では年頃の少女だった。

血生臭い戦場の話なんかよりも、春の香りがするオーデ・コロンの話をしたがつた。

冷徹なスパイが活躍する映画なんかよりも、きらきらと踊り跳ねる女優の恋愛映画を

観たがった。

墨染色の軍服なんかよりも、淡い桜色のワンピースを欲しがった。

彼女たちは本物の諜報技術を身に付けていた。

相手が望む姿を演じるのではなく、相手が望む姿そのものになった。

黒い銃の引き金ではなく、プレゼントの箱の赤いリボンを引く喜びを知る、「砂糖とスパイスと、素敵ななにか」でできた、そんな少女に。

墨染部隊が生まれてから、数年の時間が過ぎた。

艦娘による海戦の戦術は洗練され、人類は深海棲艦との戦いについて優位に立つようになった。

海軍内の士気は上がり、提督たちは英雄と扱われ、艦娘の志願倍率は千を数えるようになった。

戦況が好ましいものになると、督戦部隊などという存在は軍にとって不都合な存在になる。

墨染部隊もまた、例外ではなかった。

英雄の歩む絨毯の色は、敵の血で染め上げられる赤であり、決して味方のそれであってはならない。

そうして、墨染部隊の解隊は決定された。

墨染部隊の解隊にあたり、墨染提督と艦娘の今後についての問題が浮上した。

墨染の真実を知る当事者は海軍にとつて大変不都合なものであるが、同時に戦力としてはこのうえないほど優れたものだったからだ。

気が遠くなるほどの議論を重ねた結果、海軍上層部はある残酷な結論に達する。

それは、「墨染提督の暗殺」および「洗脳による艦娘の再利用」といったものだった。

結果から述べると、墨染提督は暗殺された。

しかしながら、これは海軍上層部が予定していた展開とは幾分か異なるものだった。

なぜならば、海軍はその当時まだ墨染部隊の洗脳に着手していなかったからだ。

元々の予定では、墨染部隊のさらなる強化として艦娘を召集し、洗脳。

その後に墨染提督の暗殺を命じることによって、その洗脳の成否を確認しつつ、厄介者を抹消する手筈だった。

だが、そうする前に墨染提督は何者かによつて暗殺され、部隊の艦娘は姿を消していた。

これについて海軍は、墨染部隊の艦娘という優れた戦力を失ったことを嘆いたが、最

優先の目標は達成されたことを喜び、行方不明の艦娘は墨染提督の後を追ったのだろうと結論づけて、あとは忘れることにした。

時は遡り、墨染提督が暗殺された夜。

墨染提督は近頃海軍内に漂う不穏な空気を感じていた。

なにか、海軍内で除け者にされているような空気である。

墨染提督は一応「提督」であったが、海軍から渡される作戦指令書を艦娘に渡し、それを実行するよう命じるのみの立場だった。

墨染提督はもともと正規の海軍の人間ではなく、墨染部隊の艦娘を管理するために雇われた孤児院の管理者であったから、そういった出自が明るみになり、正規の軍人から疎まれているのだろうと墨染提督は結論付けた。

提督がそう思うのも無理はない。

なにせ墨染提督には作戦に口を出す権利はおろか、作戦指令書の封を切ることすら許されていなかったのだから。

そうであったからこそ、墨染提督は、墨染部隊の艦娘に戦場の話を聞こうとはしなかった。

墨染提督は、彼女たちの居場所であろうとした。

その身の全てをかけて彼女らを愛し、一人の少女として扱った。

ゆえに、艦娘たちもまた、墨染提督を愛した。

それは諜報技術を存分に駆使した「提督の望む姿」であったが、それが彼女らにできる最大限の愛であつたし、墨染提督もまた、それを理解していた。

さて、話を戻して暗殺の夜。

墨染提督はちよつとした好奇心から、過去の作戦指令書の封を切つてしまった。

疎まれるのなら、海軍なんて辞めて孤児院に戻ればいい。

墨染部隊のみんなが退役したら、自分の孤児院で一緒に過ごせるようにしよう。

でもその前に、少しくらい部隊のことを知つておいてもバチは当たらないだろう、と。

はたして、そこに綴られていたのは、海軍省や鎮守府内の裏切り者を炙り出すための諜報作戦や、督戦命令の数々だつた。

墨染提督は深い絶望に陥つた。

自らが討つてと命じていたのは、敵ではなく味方だつたのかと。

軍に言われるがままに、内容も知らずに命令を下し、愛する艦娘に味方殺しという罪を重ねさせたことを悔いた。

そして、墨染提督は自ら命を絶った。一つの命令を残して。

その命令とは、『作戦指令書の内容の漏洩を試み、結果何者かによって暗殺された』風を装うよう工作することであった。

墨染提督は、その罪をたった一人で引き受けたのだ。

翌朝、艦娘たちは真実を知った。

自らの行ってきた作戦は墨染提督の意思によるものではなく、彼女と提督はただ海軍に踊らされた駒に過ぎなかったのだと。

海軍さえなければ、その手を血に染めることはなく、提督と穏やかに生きられたかもしれないなかつた。

艦娘たちは命令通りに工作を完了させ、姿を消した。

その後の墨染部隊の行方は誰も知らない……

……

……

……数年後

「……続いてのニュースです。海軍が孤児院に対し、少年兵にするための子供を要求していたことが明らかになりました。これについて、海軍は『現在調査中である』とのみコメントしており、詳細の究明が求められています。孤児院の子供たちは無事保護され、検査の後、最近設立された戦災孤児向けの孤児院に移ることが決まっています。その孤児院は戦災孤児の元艦娘たちが運営しており……」

ブリーズ・イズ・ナイス

何もかもが退屈な島だった。

本土に向かう船は月にたった三便。

島唯一といってもいい娯楽のテレビだって、チャンネルは二つしかなかった。

島の外から来る人たちは、手付かずの自然がどうか、珍しい鳥がどうか、空と海の美しさがどうか、いつもそんなことばかりを口にしていた。

でも、僕たち子供にとってはそんなものより、光化学スモッグが彩るコンクリートジャングルの方がよっぽど魅力的だった。

ブラウン管の小さな窓を通して見る都会の風景は、いつも島で見たことのないような光と音に満たされていて、それらは僕たちの網膜や鼓膜を焼き切らんばかりに刺激的だった。

だから、島の子供たちはこぞって本土を目指した。

そのなかでも一番人気だったのは軍人だ。

国の中央とつながる手段を持たない僕たちにとって、本土に渡るには軍人が一番手っ取り早く、あの頃は戦時だったから、結果さえ残せばいくらでも上を目指すことができ

た。

その中でも一際人気があったのが、艦娘を率いて戦う提督だろう。

海軍士官の中でも、初めから少佐相当の待遇が約束される提督は、島中の子供が憧れる進路だったし、僕も例に漏れず、その中の一人だった。

僕が生まれ育った島は、そこそ島流しにでも使われそうなほど退屈なところだったけれど、それでも好きな場所のひとつくらいあった。

いや、まあ、一つくらいというか、一つしかなかったのだけけれど。

波止場のテトラポッド。

僕たちが出会い、夢を見た場所。

僕と、天津風の物語。

15年前のテトラポッドから、この物語は始まる。

15年前の夏休み。

僕がまだ、短パンとランニングで自転車を漕ぎ散らかし、頭の中は虫取りアミと漫画雑誌でいっぱいだった頃。

僕は噂の転校生とやらを探して島中を駆け回っていた。

転校生が来るなんて、漫画の中でしか聞いたことない話だったから、島の子供達は全員総出で島中を大捜索していたのだ。

そうして、すこし休憩しようとおもって立ち寄った波止場で、僕は出会ってしまった。

噂の転校生の艶やかな黒髪は、穏やかな潮風に揺れていた。

テトラポッドに碎ける波を眺めるその瞳は、彼女がこの海の向こうで拾い上げてきた静けさに満ちていた。

テレビの中の、人々が忙しなく行き交うスクランブル交差点でしか存在できなさそうな綺麗なワンピース。

それを纏って、地図からも忘れ去られてそんな島で海を眺める彼女の横顔は、小学生の僕が知ってはいけないような美しさを秘めていた。

——いわゆる、一目惚れというやつだった。

何秒、いや何分見つめていたのだろう。

僕の視線に気がついたのか、彼女は僕の方を見て、ねえ、と口を開いた。

「あなた、この島の子？ひよつとしてこつて、入っちゃいけない場所だった？」

「そんなことはないよ……僕もよくここには来るし。もしかして君が噂の転校生？」

「噂？そう、もう噂になってたの。そうよ。私とその噂の転校生。遠いところから来たの。ずっと遠いところから」

「なんで君みたいなの……あー、都会っぽい子がこんな島に来たの？」

「ちよつと、いろいろあつてね。あなた、今何年生？」

「五年生だよ」

「そう。それじゃ、私と同級生つてことになるのね。よかつたら、この島のこと色々教えてくれない？」

「いいよ。何も無い島だけど、海だけは自慢なんだ。えつとね……」

そうして、僕らは夕陽が水平線の向こうに沈むまで、この島のことや、学校のことについて話していた。

僕はできれば彼女のことも知りたいと思つたけれど、彼女はうまくはぐらかして教えてくれなかった。

僕は噂の転校生を見つけたら仲間たちに自慢するつもりだったけど、そうしなかった。

彼女の静けさがなんとなくそうさせなかったというのもあるけれど、なんとなく、僕の中だけに秘めておきたい気がしたんだ。

夏休みの間中、僕は毎日のようにあの波止場にいた。

そこにいけば、いつも彼女がいたからだ。

そこで僕は、いつも日が暮れるまで話していた。

時々、彼女は都会の親類から送ってもらった菓子なんかを振る舞ってくれた。

魔法瓶の冷たい紅茶や、彼女のお気に入りの店のマカロンは、僕の知らない街の味がした。

僕が知っているものといえば、パツクの水出し麦茶とか、島のなんでも屋で買う駄菓子くらいなものだったから、それらを口に含むたびに、絶対海軍の提督になって島を出るんだと決意したものである。

夏休みが終わり、新学期が始まった。

彼女はたちまちクラスの人気者になった。

彼女はクラスで口数が多い方じゃなかったけれど、それがかえって彼女を都会的なお嬢様として引き立てた。

男子は彼女の前ではなんとなく話題を選んだし、女子は彼女といつも洋服だとか、おしゃべりの話ばかりしていた。

彼女がクラスで見せる表情は、あの波止場で僕と話していたときのそれとは違って、しずしずとしたものだったから、なんとなく僕はクラスでは彼女に話しかけなかった。

もし波止場の彼女の姿が本当の彼女だったなら、それをみんなに広めれば、きつとみんな今以上に彼女と仲良くなれる気がしたけれど、僕はそうしなかった。

彼女がそうしたくてそう振る舞っているのならそれを尊重すべきと思っていたのもあるけれど、なにより、僕だけが知っている彼女を僕だけのものにしておきたかったからだ。

あの日の一目惚れは、紛れもない恋という確信に変わっていた。

僕は、彼女に初めての感情を抱いていた。

いわゆる初恋というやつだ。

それが恋心だと気付いてからも、僕と彼女の関係は変わらなかった。

小学五年生なんて、恋と友情の区別がつかないことも多い年頃だし、彼女を自分のものにしたいたか、そういう感情はまだなかった。

僕は彼女とあの波止場で話せるだけで満足していたし、僕だけが知っている彼女の表情――彼女はよく笑う子だったし、冗談好きでもあった――が見られるだけで、僕は十分幸せだった。

それから時が過ぎ、僕らは中学三年生になっていた。

その頃には僕も現実つてものがよくわかっていたから、海軍提督つてものがプロ野球選手になるより数段難しく、今の僕では到底手の届かないものであることを知っていた。

というか、とにかく島から出られるのならなんでもよかつたし、提督になるという夢なんて、いつのまにか忘れてしまっていた。

だから、とりあえず僕はみんなと同じように島から一番近い本土の小さい町の高校に進学するつもりだったし、彼女もまたそうなんだろうと思っていた。

島の子供はみんな同じ高校に進学していたから、島を出てからも三年間はまた彼女と同じように過ごせると、僕は勝手に思い込んでいた。

しかし、僕と彼女の関係は、あの夏の夜、突然終わりを告げる。

あの日、8月31日の夜。

夏休み最後の日。

僕は彼女から誘われて、あの波止場で花火をしていた。

僕と彼女の関係は変わらず、というか、かなり親密なものになっていたけれど、それはあくまで仲の良い異性の友達といったもので、淡く抱いていた恋心はあいかわらず秘められたものだった。

僕たちはロケット花火の音や光に興奮し、手持ち花火から吹き出す色の鮮やかさに、子供のようにはしゃぎ回った。

それは僕らが出会った頃から変わらない関係性によってつながつていることを象徴しているようで、嬉しい反面、あくまでも僕らが友達だということを強く僕に印象付けた。

持ってきた花火が残り少なくなつて、最後に残つたのは線香花火だった。

穏やかな波の音にかき消されるほどか細い音を立てながら、線香花火は淡く彼女の顔を照らしていた。

彼女は美しかった。

およそ十五歳という存在が秘めうるあらゆる美しさや悩ましさ、切なさといったもののすべてを彼女は内包していた。

この線香花火が終わったら、彼女に告白しよう。

その美しさは、僕の決意を固めるに十分すぎるものだった。

はたして、線香花火の火がぼとりと落ち、波止場に静寂が訪れた。

僕はなかなか言い出すことができなかった。

花火の光に眩んだ目が波止場の夜闇に慣れ、テトラポッドに砕ける波の白さがなんとなくわかるようになった頃。

静寂を破ったのは彼女の方だった。

「あのね」と、彼女は口を開いた。

「実は私、今夜が島で過ごす最後の夜なの」

あまりにも唐突な話で、僕は陸にあげられた金魚みたいに口をぱくぱくさせることしかできなかった。

震える声で僕は尋ねた。

「どうして？明日から新学期だよ。もしかして転校しちゃうの？」

「ううん……転校じゃないわ。私ね……艦娘になるの。……言い出せなくてごめんね。ずっと前から決まっていたことなの。この島に来たあの日、あなたはなんでこの島に来たのか私に尋ねたことがあったわよね」

「うん……。だけど君は、教えてくれなかった」

「実はね、私のお父さんは提督だったの。でも、深海棲艦に鎮守府が攻撃を受けたときに死んじゃった。そのとき、私は艦娘の適性に目覚めたの。お父さんを奪った深海棲艦に復讐したいという気持ちだが、そうしたのかしらね。そうして私は艦娘になることが決まったのだけれど、私の適性に呼応した艦の記憶を受け入れるには私は少し幼かったから、私を知る人がいない場所でその時が来るまで生活することになったの。そうして選んだのが、お父さんが少年時代を過ごしたこの島。お父さんの育った場所を、私はこの目で見てみたかったの」

僕はこんな時、どんな言葉をかければいいのか、どんな顔をすればいいのかわからなかった。

そんな僕の気持ちを汲み取ってくれたのだろう。

彼女は言葉が続けた。

「艦娘として戦うためには、守りたい人と、守りたい場所を見つける必要があったの。それがないと、艦の記憶はうまく魂に馴染んでくれない。でも、それを見つけてよかった。この島にはこの波止場と潮風があつて、そこにあなたがいるんだもの。ありがとう、あなた。あなたに出会えてよかつた。この場所とあなたは、絶対に私が守るから」

そうして彼女は美しく微笑んだ。

雲の切れ間からそそぐ月の光が照らした彼女の瞳は、その表情に似つかわしくなく、
ずくに満ちていた。

僕らを照らす満月が、彼女の瞳の中で朧月に映る。

彼女のぼやけた月光が僕の網膜に焼き付くのと、僕が口を開いた瞬間の、はたしてどちらが早かつたのだろう。

「君が好きだ」

短く、しかしこれ以外にない言葉だつた。

沈黙。

そして彼女は言った。

「どうして……どうして……もつと早く言ってくれなかったの。今になってこんな感情を知ってしまったなんて。私はどうしたらいいの。あなたの言葉はとても嬉しい。でも、今それを聞いてしまったら……私……私……」

僕は彼女が涙を流すのを初めて見た。

それをなんとかしたくて、僕はこの五秒間で確信に変わった決意を音に変える。

「だから僕、提督になる。君とずっと……」

言いかけた言葉は、すべて音にならなかつた。口元に熱を感じたその瞬間、僕の声は、彼女の唇に吸い込まれてしまった。

唇が離れていく。

互いを結ぶ透明な糸は、残酷なほどたやすく切れてしまう。

「それ以上は……だめよ。それを全部聞いてしまったら私、もう艦娘になれない。お願い、あなた。私のことは全部忘れて。夢。そう、今夜限りの夢だったのよ。さようなら、あなた。元気でね……」

そう言つて彼女は歩き出した。

思わず彼女の手を僕は掴もうとして……掴もうとして……結局掴むことができなかった……

それから、猛勉強の日々が始まった。

気が狂ったかのように僕は勉強に励み、僕は県で一番の進学校に合格した。

そこでも僕は学年トップを走り、海軍兵学校に合格。

兵学校でもトップのハンモックナンバーを確保し、僕は無事提督になる資格を獲得した。

もう一度彼女に会いたい。

その一心だった。

海軍兵学校を卒業した僕は、提督を養成する海軍特別術科学校に入学した。

そこで僕は、あの日の彼女の涙のわけを知った。

艦娘になった者は、艦娘になる以前の記憶が失われてしまう。

現実にはあまりにも非情だった。

だけれど、それでも僕はもう一度彼女に会いたかった。

彼女が僕のことをもう忘れていたって、彼女に会えるのならば、それでもかまわなかった。

海軍特別術科学校を卒業した僕は、提督として着任した。

よくよく考えてみれば、彼女がどの艦の記憶を受け継いだのか僕は知らないし、そもそもこの鎮守府にいるのかも知らなかった。

しかし、僕にとってそんなことはどうだってよかった。

何年かかっても、彼女を見つげ出す。

その一心で僕は提督になったのだから。

無意識に、足が波止場に向かっていた。

鎮守府の港は僕のいた島のそれなんかとは比べ物にならないほど立派なものだったけれど、波止場とそこにあるテトラポッドを見たときは、懐かしさと切なさが胸にこみ

上げた。

そしてそこに、僕はひとりの少女を見た。

その少女の艶やかな白髪は、穏やかな潮風に揺れていた。

テトラポッドに碎ける波を眺めるその瞳は、彼女が戦場で拾い上げてきた静けさに満ちていた。

テレビに映らない、砲弾が忙しなく行き交う海の上でしか存在できなさそうなセーラー型のワンピース。

それを纏って、国防の最先端で海を眺める彼女の横顔は、提督になっても忘れなかった美しさを秘めていた。

何秒、いや何分経ったのだろう。

ただ涙を流す僕に気がついたのか、彼女は僕の方を見て、ねえ、と口を開いた。

「あなた……なんで泣いてるのよ。新しく着任した提督よね？変な人。私は陽炎型駆逐艦九番艦、天津風。とりあえず、紅茶とマカロンがあるから、これでも食べて落ち着きなさい。話くらい聞いてあげるから。って……あれ？やだ、私まで……こんな……なん

で……」

僕は思わず天津風を抱きしめてしまっていた。

瞬間、混乱した彼女の表情が驚愕に変わる。

すこし遅れて天津風の華奢な両腕が僕の背中を強く掴み、こう言った。

「……やっと会えた。おかえりなさい、あなた」

アイスクリーム・ストロベリー

深海。

限られた生命体のみが存在を許されるその空間を、私たちはビーコンの反応を頼りに深く、深く潜っていく。

ビーコンの緑色のランプが素早く点滅を始めた。

そろそろ目的地は近い。

よくよく目を凝らすと、この先の空間が不自然に歪み、滲んでいる。

「見えてきたでち」

先立って潜航するゴーヤの眩きに、私、伊168は小さく頷きを返していた。

ゴーヤと合図をし、私たちはその空間に飛び込んだ。

その先には、青白く光る巨大なドームがあった。

ドームの大きさは、およそ半径20km。

ドームの内部は、半分が灰色の建築群に埋め尽くされている。

もう半分には、広告の看板がでかかど掲げられたシヨッピングモールほどの大きさの建物や、ネオン管でけばけばしく彩られたビルが立ち並んでいる。

はっちゃんから借りたSF小説にこんな描写があつたな、なんて場違いに緊張感のないことを私は考えていた。

ゴーヤは厳しい目でそのドームを見つめている。

そう、ここは深海棲艦の中枢拠点。

私たちは敵の中枢で情報収集を行うという任務を帯びていた。

事の始まりは深海棲艦からの和平交渉の申し入れだった。

曰く、

度重なる敗北によつて深海側も大きく疲弊、厭戦ムードが高まつており、これ以降の戦局の打開には、開発済みの新兵器の投入によつて陸地をすべて海に沈めるほかなくなっている。

それはお互いに望むことではないため、和平を結び、共存の道を模索したい。

そこで艦娘を深海の中枢拠点に招待し、件の新兵器の廃棄を見届けてもらうことで、和平への第一歩としたい……

とのこと。

思わぬ和平の申し入れ、おまけに実質的な「勝利」を引き出したことに軍令部は大いに沸いた。

そこで、深海という立地の特殊さから、私とゴーヤが派遣されることとなったのである。

新兵器の廃棄は滞りなく進み、設計図もすべて適切に処理された。

深海側の技術者の記憶修正も無事に終わり、陸地が海底から吹き飛ばされ、全世界がアトランティスになる未来は回避された。

ここからは自由に観光していつて結構という深海側の好意に私たちは甘え、シヨツピングモールに足を運んだ。

「しかし、想像以上の技術力でち」

任務中はかなり気を張っていたゴーヤも、今はしげしげとシヨツピングモールの天井を眺めている。

シヨツピングモールの天井からは天然の陽光が再現された光が差し込んでおり、ここが深海ではなく地上なのではないかと錯覚させられる。

「深海棲艦も本当は、ただ光の当たる場所で暮らしたかっただけかもしれないわね」

「……そう思いたいような、そうは思いたくないような、そんな話でちね」

「でも、これできつとこの戦争は終わるわ。そうなれば、艦娘も深海棲艦も、手を取り合って生きていけるはずよ」

「そう……そうでちね。やっと終わるんでち。やっと……」

「そうとなつたら楽しんでいきましようよ。きつとそのうち潜水艦隊みんな遊びに来れるようになるんだし、いっぱい今のうちにリサーチしとかなきゃ！」

「ありがとイムヤ。ゴーヤも元気出てきたでち！みんなにいっぱいお土産買っていかなきゃー！」

そこから私たちはショッピングを楽しんだ。

はっちゃんには深海の人気作家の本、イヨには深海でつくられた青く光る不思議なお酒。

ほかに、潜水艦のみんなに両手いっぱいのお土産を買った。

ここにきて私たちは、深海棲艦にも私たちと何ら変わらない日常があるんだと知った。

艦娘も深海棲艦も本当はコインの表と裏なのかもしれないと、司令官は言っていたけれど、たぶんその通りなんだと私は思った。

「いっぱい買ったでちねえ……イムヤのショッピング狂いも考え物でち……」

「仕方ないじゃない！深海の水着もスマホケースも、とつてもかわいかったんだもの！」

「そうはいつでもイムヤ、水着を着る体は一つだし、スマホを持つ手も二本しかないの

ちよ……」

「うっ……アイスクリームをおごってあげるから、それで許してよ。ほら、そのアイスクリームスタンドで休憩しましょ」

「いいでちね！人のおごりで食べるアイスは格別でち！間宮さんのアイスクリームくらいおいしかったらいいなあ」

アイスクリームスタンドで私とゴーヤはアイスクリームを買って、近くのベンチに腰を下ろした。

私がオレンジで、ゴーヤが克蘭ベリーだ。

お互い、相手の髪の色と同じ色のアイスクリームを選んでしまって、私たちは顔を見合わせて笑った。

こんなに笑ったのはいつぶりだろう。

少なくとも海の中でこんな風に笑うことは今までなかった。

それもあってか、深海のアイスクリームは間宮さんのアイスよりもおいしかった。

アイスクリームを食べて、ゴーヤが席を外したので待っていると、一人の女の子がアイスクリームスタンドを見つめているのが目に留まった。

長い黒髪に華奢な身体。肌は若干青みがかかった白で、目は青く輝いていた。

歳は話に聞く「北方棲姫」くらいだろうか。

じつとアイスクリームスタンドを見つめるその女の子が気になって、私は声をかけた。

「あなた、どうしたの？」

女の子は声をかけられたことに驚きながらこちらを振り向く。

「えつとね……アイスが食べたいの。でも、お金を持つてなくって……」

「そうなの。お母さんは？」

「ここでアイス食べて待つてなさいって。でもね、お母さんどじだから、お金渡すの忘れちゃったみたいなの」

「そうなのね。それなら……ここはお姉ちゃんがおごっちゃうわ！好きな食べなさい」

女の子は申し訳なきような顔でふるふると小さく首を振る。

「えつ……でも、お姉ちゃんのお金が……」

「いいのよ、子供がそんなこと気にしなくて。それにお姉ちゃんの住んでるところじゃここのお金使えないしね。ほら、どれがいいの？」

「えつとね……うーんとね……ストロベリー……」

「ストロベリーね……はい、どうぞ。落とさないようにね」

「あ、ありがとう、お姉ちゃん」

「いいのよ。それじゃ、連れが来たから行くわ。またね」

「うん、さようなら」

女の子にひらひらと手を振って、ゴーヤと合流する。

「お待たせ。何してたんでち？」

「うーん、ちよつとした慈善事業よ」

「変なこと言うイムヤでち」

そんな会話をしながら、私たちはシヨツピングモールを後にした。

私たちは新兵器の廃棄が無事完了したことを軍令部に報告した。

それを受けて、軍令部は再び私たちを深海拠点に派遣することを決定した。

和平交渉の使者として、顔が知られている私たちが都合がいいだろうということからだった。

私は気づいておくべきだった。

軍令部の長官室から出てくるときの、ゴーヤのすこし硬く、それでいてどこかやるせない表情に。

深海に向かうときにゴーヤが持っていたあの鈍色の箱の中身を問い詰めなかった自

分を、中身は贈り物か書類程度に思つて気にしなかつた自分を、きつと私は、何年たつても赦さない。

前回と同じように、ビーコンの反応を頼りに、深海拠点を目指す。

空間の歪みを通り抜けると、そこにはあの日と変わらない深海拠点があつた。

そこでゴーヤは持っていた箱を開いた。

ゴーヤはなにか筒のようなものを組み上げている。

なんだろうとゴーヤに問おうとすると、ゴーヤが先に口を開いた。

「イムヤ、これから話すことを聞いて、ゴーヤを殴つても構わないでち」

ゴーヤはなにを言っているのだろう。

急に物騒なことを言い出したゴーヤに、私は少なからず動揺した。

「どうしたのよ急に……殴つていいだなんて。怖いこと言わないでよ」

「イムヤ、軍令部は初めから和平なんて考えていなかったのよ。新兵器の脅威が去つた今を狙つて、軍令部は深海棲艦の拠点を吹き飛ばし、この戦争を完全勝利で終わらせる魂胆だったのよ」

「そんな……じゃあそれはひよつとして……」

「そうでち。戦争初期に開発が中止されていたはずの対深海棲艦仕様デイビー・クロ

ケツトでち。地上の核兵器と同じだけの破壊力を海中で深海棲艦に対してのみ発揮することのできる大量破壊兵器でちよ」

私は絶句した。

私たちは艦娘。

人でありながら兵器でもある存在。

しかし、兵士としての心と、かつて核攻撃を受けた国の艦の魂を持つ存在として、超えてはいけない一線は知っている。

軍令部は、これ以上の戦果を求めるといふのか。

行き場のない怒りと悲しみに震える私に背を向けたまま、ゴーヤは静かに続ける。

「軍令部は深海棲艦の完全排除という結果を求めているでち。それが人類の平和と安寧に繋がる、と。どれだけゴーヤが深海棲艦の実情を語っても決定は覆らなかつたでち。ここにきてこのデイビー・クロケツトが完成したあたり、おそらく少なくとも金と権力が裏で動いているのは間違いないでち」

「……ゴーヤはいいの？こんな命令無視しましょうよ。こんなこと……許されるわけないわ。きつと軍令部の暴走よ」

「……許す、許さないを決めるのはいつだつて勝者の特権でちよ。それに、ゴーヤたちは軍人。命令に背くことはできないでち。……督戦隊も控えているでち。撃たなきや、撃

たれるのはゴーヤたちでちよ」

ゴーヤはどうしてこう冷静でいられるのだろうか。

艦隊で一番の親友がこんなに冷たく思えたことはなかった。

こんなにも情けなく思えたことはなかった。

これが軍人としての素質なんだろうか。

もしそうならば、私は落第点の軍人でいい。

「督戦隊がなによ！戦意のない敵を撃つくらいなら、私が撃たれるほうがいい！たしかに私たちはたくさん敵を葬ってきた。でもいつだって、私はそこに軍人としての一線を引いてきたつもりよ。虐殺者として生きるくらいなら、私は軍人として死ぬわ！」

「……軍人として死んだ後に、潜水艦隊の皆が殺されてもでちか？」

「えっ……」

「ゴーヤたちが撃たなかった場合、潜水艦寮とゴーヤたちの実家は跡形もなく吹き飛ばされることになっているそうでち。今日はゴーヤたち以外の潜水艦は寮にて待機。……腹を括るしかないものでちよ」

「そんな……そんな……」

もう私は何も考えることができなかつた。

世界のすべてが私を裏切った気がした。

絶望という言葉は、きつと私たちのためにある言葉だ。

「……そろそろ気の短い督戦隊の連中が痺れを切らす頃でち。幸い、発射は一人でできるから、撃つのはゴーヤに任せるでち。イムヤは付属の双眼鏡で戦果確認を頼むでち」

「ゴーヤだけにやらせるわけにはいかないわ！私も……」

そう言ったところで、ゴーヤが不意につぶやく。

「……ストロベリーも、おいしそうだったでちね」

「……見てたのね」

「あれを見たときに、ゴーヤもこの和平の成功を確信していたでち。なのに、こんな結果になるなんて……自分を殺してやりたいでちよ」

それを聞いて、私はもうゴーヤの顔を見ることができなかった。

一人で今日まで痛みを抱えてきたゴーヤを冷たいだとか、情けないと思った自分が許せなかった。

双眼鏡を手に取り、静かに覗き込む。

もう私たちの間に言葉はない。

デイビー・クロケットから撃ちだされる弾頭の軌跡が、昔テレビで見た、遠い国の内乱のミサイルのそれみたいだと思った。

私たちは今、同じことをしているのだ。

ひどく現実感がない。

弾頭はスローモーション。

あの子だけでも助かってほしいと頭を動かす。

そして、街角のアイスクリームスタンドで。

一人の女性に連れられて。

黒髪を揺らす少女の手にはピンク色のアイスクリーム。

あの子の笑顔が目には焼き付いた。

瞬間、双眼鏡の視界は真っ白に溶けた。

私は軍を辞めた。

あれから20年が経った。

私は今、遠く離れた内陸の国で、一人の男性と結ばれ、子供を授かり、幸せな家庭を築いている。

戦争はなおも続く。

和平の裏切りはこれまで以上の戦火を呼ぶことになった。

20年経っても、人類と深海棲艦の戦争は終わっていない。

ゴーヤはまだ戦っているのだろうか。

あの日、引き金を引かなかった私を、どうか赦さないでほしい。

冷たい海の中から離れ、温かい家庭から離れられない私をどうか赦さないでほしい。
娘がストロベリーのアイスクリームをねだる。

私は買い与える。

こんなささやかな幸せを、私はあの親子から奪ってしまった。

誰一人救えなかったこの手で、私は娘にアイスクリームを買い与える。

どうか、海の底から、私を恨んでほしい。憎んでほしい。赦さないでほしい。

アイスクリーム・ストロベリー。

溶けたしずくが、土に落ちてじわりと染みだした。

ミル・マイ・ハート

最初は正直、あんまり好きじゃなかった。

確かに顔は良いけれど、無愛想だし、何考えてるかよくわかんないし。

世間話の一つでもって口を開いたって、三十秒も話が續かない。

長門さんなんかは実直で無駄も隙もない軍人の鑑だなんて言っていたけど、どう考え
たってただの堅物だ。

巡洋艦以上の娘たちはクールでかつこいいなんて裏できゃあきゃあ騒いでたけど、私
は正直その良さがよくわからなかった。

イケメンが見たいだけならいくらでもうちの酒保にアイドル雑誌は置いてあるわけ
だし、むしろそうした雑誌の売上が落ちてちよつと迷惑に思っていたのが本音だ。

昔から、恋というものに縁がない女だったと思う。

高専に進学したから周りに男はたくさんいたけれど、油まみれの手で常にレンチを
握っている女は高専でも恋愛対象にならなかつたみたいだ。

ネイルや化粧の一つくらい知ってたら違つたのかなとか思つた時もあったけど、同じ
色を塗る作業をするならプラモデルをウエザリング塗装してる方が幸せだったから仕

方がない。

高専を出た私は艦娘になった。

狭き門といわれる艦娘工作艦試験を突破した私は「明石」として生まれ変わった。

正直ピンク色の髪はどうかと思つたが、そもそも人間やめたんだから別にいいかと思つさり割り切つた。

別に髪の色がピンクだろうが緑だろうが、手先が狂うわけじゃないし。

むしろ明石の船霊の影響か、性格が前より明るく社交的になつたのは良かったと思ふ。

いろんな人と仲良くできなきや工作艦は務まらないということだろうか。

提督が着任したのは、今年の春先のことだつた。

夕張と秋津洲といういつもの工廠仲間三人で「花見宴会芸仕様トリプルドム」のプラモデルを製作していたときのことだからよく覚えている。

提督は着任後提督室にも行かずに工廠にやってきた。

案内していた大淀いわく、「提督室で戦闘するわけではない。戦闘は準備する工廠から始まるのだから、まずはそこを見ておきたい」という理由だつたらしい。

工廠でのプラモデル製作を見られたときはちよつとやばいかなと思つたが、特にそれを咎めることなく、かといつてなにか感想を寄こすわけでもなく、提督は二つ三つほど

訓示を残して去っていった。

初対面の感想は三者三様だった。

秋津洲は「かつこいいけどちよつとこわいかも」って苦笑してた。

夕張は「最近観てたアニメの推しに雰囲気似ててかつこいい」なんて言ってた。

このメロン、結構なミーハーなのである。

私はあまり興味がなかった。

強いて言えば、オルテガ機の頭に巻いたネクタイの精巧さに少しくらい感想が欲しかったところだ。

前任の提督はあんまり酒保にも工廠にも来ないタイプだった。

海軍省のポストが空くまでとりあえず、といった程度のスタンスだったから、それも当然のことだったのだろう。

今度の提督も似たようなものかな、と思っていたけれど、そんなことはなかった。

提督はよく酒保に足を運んだ。

提督は決まって、個包装された飴玉やチョコレート、女性ファッション誌を買っている。

「私は無愛想で避けられがちだから、少しでも艦娘と交流の場を持ちたくてね」

なんて、少し困ったような笑いを浮かべながら気恥ずかしそうに、彼は流行りの女優

が表紙を飾る雑誌をレジに差し出す。

「あれはみんな恥ずかしがってるだけで、裏ではみんな提督のことばかり話してますよ」と言おうかと思っただけ、なんだか悔しくて、私は「大事なことだと思えますよ」とだけ返しておいた。

私はその気持ちの出どころに気づいてなかったのか、それとも気づいて無視していたのか、今となってはよくわからない。

そんな関係が半年は続いただろうか。

うちの鎮守府の酒保が工廠と隣接しているおかげで、提督は買い物のおあと工廠に入り浸るようになった。

差し入れなんていって、提督はいつもちよつといいコーヒー豆と茶菓子を工廠に持ち込んでくれる。

そして、コーヒーを飲みながら私たちと少し雑談して仕事に戻っていく。

いつの間にか、提督と世間話に毛が生えたくらいの話ができるようになった。

部下が気おくれしない程度の差し入れをしてくれるところに、私は提督の人間性を感じていた。

他の鎮守府では、明石は明るく快活なタイプと聞く。

同じ明石なのにそうではない私にも、等身大に接する提督に、私は知らない感情を

持つていることに気づく。

半年過ぎすころには彼氏がいて当たり前といわれる高専でも、クラスメイト以上の関係を持たなかった私は、この感情になんて名前を付ければいいのかわからなかった。

「そういうええ提督って、休日にも鎮守府にいますよね。上陸しないんですか?」

ある日のこと、いつものように提督と四人でお茶をしていると、ふと思いついたかのように夕張が言った。

「上陸……ああ、外出のことか。私はこの街に家族も友人もないからね。特に街に出てもすることはないし……自室で本を読むか、作戦を練っていることが多い」

「えっ、休日にも仕事してるんですか」

「そうだ。私の作戦ひとつで君たちの戦果はもちろん、安全、時には命に関わってくるんだ。いくら時間をかけても足りないくらいだよ。それに、休日でも仕事をしているのは君も同じだろ。よく明石や秋津洲と一緒に装備改修してるじゃないか。いつも感謝しているが……休日は君たちの自由な日なんだから、遠慮なく街に繰り出していいんだぞ」

「いやー、私たち結構好きでやってるんで。機械いじりすること以上に幸せな休日はありませんよ。というか、提督彼女さんとかいらつしやらないんです?」

「あいにく、そういうものに縁がないみたいだね」

心臓がどきり、と跳ねる音がした。

そして、提督が言葉を発するその直前、その刹那に、私の胸の中の、なにか柔らかいところがちくりと痛む感触を、私はたしかに感じ取っていた。

心臓が跳ねる音。

そんな比喩にすぎないものが、空気を震わせるはずもないのに。

そして、仮に震わせたところで、心臓が拍動を刻むのは当たり前なはずなのに。

どうか聞こえてませんようにと願う自分がいて、私はその意味が分からないまま、目を伏せて冷めかけたコーヒーに口を付けた。

不思議と甘いコーヒーだった。

グラニュー糖じゃない甘さ。

それだけはなんとなくわかった私がいいた。

なにも手につかない日々が続いた。

提督のことばかり考えてしまう私がいる。

提督のことばかり目で追ってしまう私がいる。

提督を見ればレンチを落としてしまうし、提督の声がすれば次に締めるべきネジがどれだったかわからなくなる私がいる。

コーヒーの匂いをかければ提督のことを思い出す私がいいて、自室にコーヒーミルを置い

てしまった私が出た。

鈍感な私でもようやく気付く。

私は提督に恋をしていたのだ。

高専で浮いた話の一つもなかった私が高専か、と思っていたけれど、秋津洲から押し付けられるように勧められた少女漫画を読んで、その疑惑は確信に変わっていた。

彼を見ると胸があたたかくなる。

彼の声を聞くと振り向きたくなる。

彼の差し入れと同じコーヒー豆を自室で挽くと、手にうつったコーヒーの香りをいつでも嗅ぎたくなる私がある。

両手でマグを包んでコーヒーを口にすると、体温を帯びた香りに後ろから抱きしめられ、大きな何かに両手を包まれる錯覚を感じる。

どうしようもなく純粋で、プラトニックなエネルギー。

感情の行き場がわからず、聞き分けの悪い子供みたいに駄々をこねなくなるエネルギー。

一人の人間を独占したいと願う、優しくも暴力的であり、暴力的でありながらも優しいエネルギー。

春風のように陽気で穏やかなのに、やがて夜になれば、それが嵐を呼ぶことを確信す

るエネルギー。

初めて知るエネルギー。私の知らないエネルギー。わたしの初めての恋。かわいくなりたい。

わたしははじめてそう思った。

手が油まみれになっても、髪に金属かすがついてても、なんとも思わなかったわたしがはじめてそう思った。

この感情を、手放してはいけない。

はじめての感情だったけど、それだけはたしかにわかった。

足柄さんにファッションを教わった。

百貨店を出るたび、知らないわたしがショーウィンドウに映る。

陸奥さんにメイクを教わった。

鏡を見るたび、知らないわたしが光線になって反射する。

龍田さんに香水を教わった。

呼吸するたび、知らないわたしが鼻腔をくすぐる。

熊野さんにスキンケアを教わった。

顔に触れるたび、知らないわたしが触覚を通じて存在している。

鈴谷さんにネイルを教わった。

爪を見るたび、知らないわたしがレンチを握りたくないと言う。

夕張が私の知らないわたしを見て、「どうしちやつたのよ明石」と心配そうな顔をす
る。

秋津洲が私の知らないわたしを見て、「明石すつごくかわいくなつたかも。あ、かも
じゃない！」と嬉しそうに笑いかけて、ちよつぴり顔を赤らめる。

私の知らないわたしを、どんどん好きになるわたしがいる。

どんなにやってみようと思ったことか。

どれほどかわいくなる努力をしようと思ったことか。

何度も考えて、そのたびに挫折して、そのたびに自分を嫌悪して。

これまでできなかったことが、たった一人の存在と出会っただけで、できるようになつたわたしがいた。

私が知らないわたしに出会ううちに、提督と仲良く話せるようになっていった。

「提督の執務室は工廠に移しましょうか」なんて、大淀が冗談を飛ばすくらいには、提督は工廠に足を運んでいた。

工廠組のなかに提督の意中の艦娘がいるに違いない、なんて噂も流れていた。

それがわたしであることを、わたしはこの戦争の勝利よりも願っていたし、それがわたしでないことを、わたしは轟沈よりも恐れていた。

艦娘の身でありながら、そんなことを考えてしまうほどに、わたしは提督に恋焦がれていた。

いまでも私は覚えている。

蒼い月光が無慈悲な美しさを秘めて、静かに玄関ホールのピアノに降り注ぎ、弦の上で輝き波打つあの夜を。

提督が着任して、ちょうど二年が経ったあの日のことを。

わたしは決意に満ちていた。今夜しかないと思った。

二年前にわたしと提督が出会った、この日この夜しかない。

きつとわたしは、そのときうまく、言葉を音に変えられないから。

わたしは何度も書き直して、何枚も便箋を無駄にして、それでもおさまりきったとは思えない気持ち握りしめて、執務室の机のメモに書き残した約束の場所に、ふるえる足を鼓舞して向かう。

どうしてなんだろう。

どうしてわたしは、あの夜を選んでしまったんだろう。

玄関ホールに近づくと、二人の声がある。

すこしからかうとムキになって「そうじゃないかも！」なんて言ってくる、大人と子供が混じったような声がある。

耳に嗅覚はないはずなのに、コーヒーの香りを覚える声がある。震えながらも、凜とした声。戦いを知る艦娘にしか出せない声。

いつも工廠を賑やかにしていたあの声、戦いに臨む色を帯びている。

わたしの知らない、わたし明石が知っている、三月のパラオの風が吹く。

踵を返すのが遅かった。

月光の下で、影が重なる。

二人の影がひとつになって、私のやわらかい部分が、ごぼごぼ、と黒い水を飲みこんでは吐き出した。

気づくと、私は部屋にいた。

化粧品のボトルが床に散らばり、割れた香水瓶がむせ返るほどに醜く香る。

吸い込まれそうな大穴があった鏡台に、わたしの知らない私が映る。

ところどころ欠けてしまった私の虚像は、コーヒーミルを右手に握って振り上げていた。

はじめて提督と二人で出かけたあの日、最初で最後になるんだろうあの日に、選んでもらったコーヒーミル。

ハンドルを握るたびに、あの人を感じたコーヒーミル。

メイクはぐしやぐしやになって、ネイルはひび割れて、お気に入りになったスカート

はとところどころ破れてしまつて。

それでも、コーヒーミルを床に叩きつけられないわたしがいた。

私は、もう一度人を好きになることがあるのだろうか。

私は、あの子のことを祝福できるのだろうか。

あの子がコーヒーミルのハンドルを握るとき、そつと優しく、一回り大きな手がそれを包み込む。

どうしてわたしじゃないんだろう。どうしてあの子なんだろう。

こんなにも頑張つたのに。こんなにも好きだったのに。

初めての恋だった。最後と確信する恋だった。

私がよく知る、かわいくない私。

振り向くあなたを想つては、どうしようもなく救えなくて。

振り向かないあなたを想つては、どうしようもなく焦がれてて。

そんなどうしようもない夜を、シングルベッドでひとり震えて超えたわたし。

ぜんぶわたし。ぜんぶかわいくないわたし。

「私、かわいくなかったね」

かわいくないわたしが、鏡の中でつぶやいた。

夜鷹の明日

夜が曖昧さをそぎ落とし、徐々に研ぎ澄まされてゆく。

焼け跡にとても似合わぬ喧騒は輝きを増し、蠱惑的な紫の香りが私を包む。

私は懺悔に来たのだろうか。

それとも、新たな傷を増やしに来たのだろうか。

それは誰のため、と問われても、私にはわからない。

敵と味方の区別すら曖昧になりつつある私にとって、傷を増やす対象というものは、空虚で意味を持たないものだ。

私は除隊処分を受けた。

艦娘であり続けるには、あまりにも私は「兵器」だった。

試験管の中で存在を与えられ、船霊ふなだまを受け継いだ私。

肋骨の代わりに暴力と殺戮の意志を与えられたキリングマシン。

女の肉を着た、鋼鉄と重油で形作られた存在。

海の意志に依らず、戦の過去を知らず、人に祝福されずに生まれた艦娘。

それが私だ。

私は焼け跡のバラックの隙間を縫うように歩く。

今夜もメチールで明日の光を失う輩が騒いでいる。

金を払わぬ客の頭部を、店主が一升瓶で殴りつける。

言語野が死滅するまでの一瞬は伸びきり満たされ、刹那に命を散らす彼岸花が咲く。

この焼け跡に「明日」はなかった。

「明日」はずっと以前に売り切れていたし、そもそも「明日」なんて誰も望んではいない。九九艦爆の、二五〇キログラムの炎がすべてを買い漁っていった。

遠い海の向こう、かつて私が住処とした煉瓦と鈍色で形作られた虚構の箱庭で、それは大事に、されど豪奢に、消費されていく。

私は梅色の毒に彩られた戸を叩く。

戸の隙間から対の、琥珀色の沈殿した愛が私を見つめる。

彼は私を招き入れる。

私はかつて「街」と呼ばれたこの場所からすべてを奪い、さらに彼から奪い取ろうと
している。

しかし、彼は私を与える者だと思ふのだろう。

今までも、そしてこれからも。

彼は明日を迎える期待と、行き場のない孤独を知る手つきで私の差し出す金を受け取

る。

かつて血と炎の対価として与えられたそれを、彼は数え、戸棚にしまい込む。そうして、私を薄汚れたシーツに誘う。

思い入れのない異国の地で、苦悶に歪む彼の顔を私は見つめる。

きしむスプリングが、私の本能を刺激しようと咽び泣く。

私を証明するかのように、彼は私の髪を掴もうとする。

私の死滅した蛋白質は、彼の手の中に留まらず、さらさらとこぼれおちていく。

単一の意志に彩られた衝動が、私を知って、その儂い命を終える。

彼は傷だらけの私の背をなぞる。

体温をもう知ることのない肉の抉れが、今夜も彼の涙を誘う。

生きるための衝動、それをねじ込む暴力。

自然がつくった当たり前のシステムなのに、彼はそれを望んでいない。

私はそれを知っていて、金と引き換えに、今夜も彼の獣性を買う。

望まれる暴力があつたとして、望む暴力はあるのだろうか。

私はたくさん殺してきた。私はたくさん沈めてきた。私はたくさん焼き払ってきた。

それは私に望まれたこと。私が生を受けた理由。

使命と運命に彩られたわけではなく、ただ組織の都合で「建造」された私たち。

私が、海から生まれ、海で出会い、海に消えていったなら。

私は、勲章の価値を覚え、命の価値を訴え、敵の価値を尊ぶことができたのだろうか。「殲滅対象」の存在価値を推し量る回路を持たない私には、命令を疑うことなどできなくて当たり前だった。

だから、私はこの思考を、手早く静かに片付ける。

私には彼がわからなかった。

奪われて、すべてを失ってなお、与えようとする彼がわからなかった。

知ってか知らずか、すべてを奪った私に与えようとする彼がわからなかった。

だから、私は彼に暴力を望む。

私と与えられるものは、暴力だけだから。

私と与えられるのは、望まれた暴力だけだから。

私と与えられるのは、暴力を望むことだけだから。

そうして私は彼の「明日」を人質にして、今夜も彼の暴力を買う。

彼の望まぬ彼の暴力を、私は買う。

望む暴力はここにあった。

でも、私は気づかないふりをして、今夜も彼の暴力を買う。

一羽の夜鷹が、抱えた獣性を嘆いて啼いた。

一羽の夜鷹が、望まれた獣性を呪って啼いた。
一羽の海鷺が、望んだ明日を願って啼いた。
一羽の海鷺が、殺した夜鷹を呪って啼いた。

私の夜戦

「ここにいたのか。探したぞ」

ざり、ざり、と砂を踏みしめる音がする。

後ろ斜め右、三百メートル手前から足音は聞こえていた。

味気ないなあ、と私は小さく舌打ちをして、唇をかすかにゆがめる。

夜の砂浜でひとり、男が探しにきてくれた。

だというのに、艦娘の聴力の前じゃ、ムードもへつたくれもない。

「よつこらせ」

その歳でそのセリフは少しかと思う。

もつところ、あるじゃん、なんていうかさ。

「隣、いいかな」みたいな。

気の利いたセリフってやつ。

「腰がいてえんだよ」

「あれ、聞こえてた？」

「いいや。でも、お前はいつも心の中で一言多い」

「すぐに口に出すのをやめただけ」

「そうかい。ほら、飲むだろ？」

そう言つて、提督は缶コーヒ―を差し出す。

「あたし微糖がいい」

「……なんで見てもないのにブラックつてわかんだよ」

「音。缶が揺れるときの音でわかった。ブラックと微糖買ってきたんでしょ」

「あいかわらずとんでもない耳してんな」

「……化け物だからね。もう」

私がそう言つと、提督はなにも言わずに微糖の缶を私の頬に当てる。

まだ十分に温かい。

探したなんて、嘘つき。

本当はどこにいるのかわかつてたくせに。

私は膝を抱えたまま缶を受け取る。

隣でパキヤ、とプルタブを引き上げる音がする。

「にげえなあ」

提督の眩きが、音になったそばから渚にとけてさらわれていく。

「飲まないのか？」

提督が水平線を見つめたまま言う。

「飲むよ。ありがと」

私は波間にのびた月明かりを見つめながら言う。

プルタブに人差し指をかける。

引き上げた途端、プルタブがちぎれてしまった。

私はそのままプルタブを飲み口に押し込み、冷めはじめたコーヒーに口をつける。

私たちはなにもいわず、海を見つめたままかわりばんこに缶に口をつける。

糸電話みたいだ、と、思った。

円筒に交互に口を寄せ、私たちはコミュニケーションしている。

このスチールの糸電話に糸はない。

いや、あるのかも。

でも、あったとして、多分それはピンと張ったピアノ線だと思う。

目に見えないくらい細くて、指をあてて滑らせれば、ぱっくりと血が流れる。

「川内、あのさ」

提督が不意に口を開く。かすかなラグがあり、続く言葉は修正される。

「火、貸してくれ」

「忘れたの？しょうがないなあ」

「なんだ、お前持ってたのか。ダメもとで聞いたのに。いつもは夜戦で命取りになるって、海の見える範囲じゃ煙避けてるからさ」

「今夜は、ね。提督、あたしにも一本ちようだい」

「しかたねえな。エコーしかないけど、いいか？」

「いいよ。提督は変わらさずエコーなんだね。神通が嫌がってたつけ。臭すぎるって」

「那珂は気に入ってたけどな。オレンジのパッケージは川内型の色だ、って」

「提督、那珂『ちゃん』だよ。那珂はずっとアイドルだからさ、そのへんうるさいんだよ」

「そか、悪い。てか、お前も呼び捨てじゃねえか」

「いいんだよ、あたしは。今までずっとネームシップだったんだから」

風にかき消されながら、提督はくわえたエコーに火をつける。

へたくそ。

ターボライターじゃないんだから風向き考えなよ。

でも、私は何も言わない。

提督が言わなかったから。

「これからは？」と、言わずにいてくれたから。

「海で呑む煙は、どうしてこう、苦いのかね」

提督は探っている。

「……船乗りが海に吸殻をたくさん捨ててきたから」

私は答えない。

「海に墓標はないから。吸殻の数が墓標に追いつくまで、海を見ながら吸う煙草は多分苦い」

私は、答えない。

「川内にしてはロマンチックなようで、すこしだけセンチな答えだな」

「一言余計。でも、神通は好きそう」

「神通は、そうだな。那珂は嫌がるかもな。全然ロマンチックじゃない！つて」

「言いそう。絶対言う。てか提督、那珂『ちゃん』」

すまんすまん。そう言いながら、提督は白いフィルターに口をつける。

ただでさえ短いエコーなのに、少しだけ風があるからよく燃える。

「あちっ」

ばか。エコーで貧乏吸いするからだよ。

私のエコーも、いつのまにかぎりぎりの長さになっていた。

砂に押し付けて、吸殻を空き缶にねじこむ。

きちんと消えてなかった。

缶を揺らすと、プルタブと一緒に小さな火種がちろちろと舌を出す。

「さすがに冷えるな」

そう言いながら、提督は懐から小さな瓶を取り出す。

「ジム・ビーム？」

知ってて私は問いかける。

「うん。飲むか？」

「飲む。帝国海軍の提督なのに、スコッチじゃないんだね」

「うるせえ。いつもはジョニ黒だっつーの。文句あるなら飲まなくていいぞ」

「嘘、うそ。文句ないよ。ありがたくいただきます」

「最初からそう言え……ほら」

ジョニ黒が普段飲みなんて、今の時代じゃ大した自慢にならないよ。

そんな言葉とともに、私は瓶に口をつけて傾ける。

かすかなドライさ。本当にかすか。

変わらないんだね、と思う。

海を見つめてジム・ビームを飲むこと。今夜、海を見つめてジム・ビームを飲むこと。

ジム・ビームを飲む横顔、エコーを挟む指、さざなみ、渚、月明かり、変わらない。

変わらないけど、慣れない。

「今夜」を何度繰り返しても、私は慣れない。

私「たち」とは言えない。

提督と私の目に映るものは、同じなようで違うから。

提督の目に映るのは、きつと、そう。

かつての妻と、愛すべき義理の妹。

私の目に映るのは、愛くるしい二人の妹。

そして、愛した男。隣の男。ジム・ビームをあおりながら、エコーをふかす男。

男には、永遠になつた愛だけが目に映る。

男つてきつとそうだ。

私はよく知っている。

そして、男の目に映りたくて、永遠になつてしまいたくなる、私という女の愚かさ。

それをこの男は、提督は、知りすぎるほど知っている。

懐かしく、そして嫌いだ。

あたしは知ってる。

提督がもうほとんど煙草を吸わないことを。

提督がもうほとんど酒を飲まないことを。

提督は知ってる。

あたしがヘビースモーカーで、念入りに消臭していることを。

あたしが早朝隠れて鎮守府の外まで空き瓶を捨てに行っていることを。

神通がこっそりエコーを買って、その煙を一人で見つけていたこと。

本当はバーボン党だったけど、提督に酌をしたくて日本酒党のふりをしていたこと。

そして、あたしがそばでそれを見守っていたこと、それを見つけていたこと。

神通がエコーの煙にまみれながら酌をする未来を手に入れたこと、あたしはそれを手酌でみつめていたこと。

提督は、この男は、全部知ってる。

だから今夜だけ、提督はあたしとエコーを吸って、ジム・ビームを飲む。

15センチ、義理の姉と弟に適切な距離感で、並びながら。

あなたのそんな優しさが、あたしは大嫌いで、大好きだった。

繰り返される今夜に、偶然みたいな顔をして、あたしの決意を揺らがせる。

あなたのそんな優しさが、あたしは大好きで、嫌いだった。

失ったふたりがなによりも強く私たちを結びつけるのに、それでも15センチの間で、神通の右手と左手が、あたしの右手と提督の左手を握っている。

那珂が後ろから三人を抱きしめる。

「アイドルはね、抱きしめても抱きしめられちゃダメなんだ！ファンに元気をあげるのが、アイドルの仕事なんだから！」

馬鹿。馬鹿だよ、那珂。

あんた全部知ってたんでしょ。

それでもあたしを抱きしめるんでしょ。

馬鹿。那珂の馬鹿。

「もう私は、隣にいること叶いませんから。だから姉さん、お願い。あの人はとても寂しがりやだから」

馬鹿。神通の馬鹿。

知ってたよ、あたし。

あんたがあたしの気持ちに気づいてて、毎晩泣いてたの知ってるよ。

あたしを傷つけたくなくて、でも提督のことが好きで。

好きで、好きで、どうしようもなくて。

知ってたんだよ、あたし。

だからあたし、毎晩夜戦に行ってたんだよ。

好きなわけじゃないじゃん、夜戦なんて。

怖いよ。夜の海はいつも怖い。夜戦を楽しみたいと思つたことなんて、一度もなかつた。

でもそれ以上に、泣いてる神通を見たくなかつた。

つらくて、かなしくて、こわれそうだった。

逃げたんだと思う。

あたしは臆病だから。弱虫だから。

でも、お姉ちゃんだから。

あんたたちを守るようになりたかつた。あんたたちの未来くらいは守りたかつた。

でも、無意味だった。

遅かつた。全部が遅かつた。

あんたたちのこと、結局守れなかつた。

どれだけ夜戦の経験を積んでも、結局守れなかつた。

聞いてよ、神通。聞いてよ、那珂。

やつとあたし、改二になつたんだよ。

探照灯も、照明弾も、夜偵だつてあるんだ。

もう夜の海にあたしの敵はいないんだ。

でも、もう、遅いんだ。

遅かったんだ。ごめんね。ごめんね。

神通。那珂。ごめんね。

気がつくと、提督はいなくなっていた。

外套が雑に背中にかけてられている。

外套のポケットをまさぐり、エコーを取り出す。

繰り返し返される約束事。

ほら、やっぱりあった。

片方だけ銀紙を破ったエコーの箱。

そこに差し込まれている紙切れを私は開く。

今夜は冷える。早めに戻れよ。

馬鹿。

全部言ってしまうから提督は駄目なんだよ。

紙がさ、なんか湿ってるんだよ。

文字がさ、にじんで読みにくいんだよ。

提督の馬鹿。

折れたエコーのフィルターをちぎって火をつけた。

ジム・ビームを三口だけあおった。

そして私は、提督が砂浜に残した足跡を慎重に、半分だけ踏みながら、ゆっくりと一歩踏み出した。

提督、あなただとわからなかった

「奥様、お迎えが参りました。海軍省の砂川中尉です」

縁側の方から齋藤が声をかける。

今年は竜胆りんとうが綺麗きれいに咲いた。

傾けていた如雨露じょうろうを上げ、私は振り返る。

「ありがとう、齋藤」

「いえ、奥様。準備の方は整っております」

「それなら、行きましようか。砂川さんをあまり待たせるわけにはいかないわ」

「奥様……あの……」

齋藤は迷ったように目を伏せ、口ごもる。

十五の頃より数えて八年の奉公になる娘だが、こうした仕草はいまだ少女の面影をしのばせている。

「齋藤、今年は竜胆の花が鮮やかだわ。あの人の好きな竜胆の花……」

「奥様……」

「……あの人は見ることもかなうのかしら」

私は返事を待たず、玄関に向かう。

砂川中尉が敬礼し、私は胸に手を当て答礼する。

「砂川さん、私はもう艦娘ではないのよ。海軍士官がそうやたらに敬礼するものではないわ」

「すみません。しかし私どもにとつては、いつまでもあなたは艦娘。戦艦大和ですので」

「……昔話は不要よ。それより早く行きましょう」

砂川中尉は何かを言いかけ、言葉を飲み込んだように見えた。

運転手が開けた観音開きのドアから、私たちは無言で車に乗り込む。

砂川中尉は運転手に、出せ、と短く命令した。

行先は、海軍病院。

院内は静まり返っていた。

秋の陽光が廊下の窓から柔らかく差し込んでいる。

沈みきれない影を泳ぐ金色の単横陣。

病室に触先を向けた光のアーチは、さながら見舞う人々の祈りのようだった。

目的の部屋の前で、砂川中尉が扉をノックする。

「砂川中尉は宮本提督の奥様をお連れしました」

入れ、と返事。若い女の声だ。

「入ります。……どうぞ、奥様」

砂川中尉が扉を開け、背で扉をおさえる。

私が入室すると砂川中尉は、私はこれで失礼します、と言いつ残し去っていった。窓際に据えられたベッドの周囲にはカーテンがかけられていた。

純白に限りなく近い銀髪を揺らしながら、女がベッド脇の椅子から立ち上がる。

「はじめまして、宮本夫人。翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴です。宮本提督の秘書艦を務めさせていただけます」

「はじめまして、翔鶴。私は『大和』と名乗った方がいいのかしら。それとも宮本の妻？」

「……退役したとはいえ、『初代』大和は、私どもの間ではいまだ一つの伝説です。しかし、この病室では『奥様』と呼ばせてもらおうかと思えます。よろしいでしょうか」

「構わないわ。それより、夫の容体はどうなの？」

「……安定こそしているものの、いまだ植物状態です。医師の言では、これ以上の回復は絶望的だろう、と」

「……そう。カーテンをあけて頂戴」

そう言うと、翔鶴は無言でカーテンを開く。

夫の顔は激しく焼けただれ、もはや鼻と口の区別はつかなくなっていた。

顔の上半分は包帯に覆われている。

私はかけ布団越しに、夫の左腕に手を伸ばす。

そこに左腕はなかった。

左半身の三分の二が吹き飛んだんです、と翔鶴が呟いた。

私たちは何も言わず、横たわる夫を見つめていた。

「夫は、どんな提督だった？」

沈黙を破り、私は翔鶴に問いかける。

「提督は常に最前線に立たれる方でした。陸わかから無線で指示される提督が多い中で、常

にブリッジから戦況を把握していました。戦場で艦娘と危険を共有することを、なによ

り大事にしていました。くだけた態度こそ苦手なもの、心配りと気前の良さを忘れな

い方でした。艦娘の悩みに黙って向き合い、そうして立ち直った娘も多くいます。誰か

が轟沈した夜には……」

私は翔鶴の言葉をさえぎって、後を引き取る。

「部屋に鍵をかけて、蠟燭に火を灯す。それを見つめながら、カリラを注いで、グラスを

傾ける。空にするまで、彼は一言も発さない。そして、飲み干した後、一言だけ呟く。

……知ってる？」

「……『カリラのボトルが軽くなるにつれ、僕の魂も軽くなる』」

翔鶴は私の目を見ない。

構わないのに。

あなたが私に罪悪感を持つ必要なんてない。

「信頼されていたのね」

私はほつりとこぼす。

すこしだけ声色に効かせたアイロニーは女の意地なのかもしれない。

翔鶴は何も言わない。

「……大事にしてくれた？」

翔鶴は消え入りそうな声で、はい、と言った。

あの人は艦娘が轟沈した夜、秘書艦だけを執務室に入れ、静かにカリラを飲んでその死を悼む。

あの人は公私の別を分ける性格だったから、秘書艦は当番制だ。

おそらくそれはあの頃と変わらないだろう。

しかし、提督も生身の人間であり、ゆえに情はある。

あの人が「僕」という一人称を使うのは、限られた相手の前だけだった。

そして、カリラを飲み干した後「それ」を呟く相手も、限られていた。

抱えきれない感情に押しつぶされそうな人。

だから私は彼に抱かれた。

そして、彼女も。

私はあらためて、ベッドに横たわる夫を見つめる。

作務衣姿で縁側に腰かけ、煙草を呑む姿を思い出す。

あの人に抱かれて二十年、あの人の妻になつて十五年が過ぎていた。

失われぬ明日を求めて、私は明日なき戦場を退いた。

そうして手に入れたはずの、あの人との幸せな日々。

でも、あの人の瞳はいつでも海と、そこで交わる砲火をみていた。

碇を下した日々の波は、私から大和の船霊ふなだまを洗い流していった。

淡々と過ぎる日常は、私の戦場を炊事場に縛りつける。

あの人の提案で齋藤を奉公に雇い入れると、私の砲身はすべて錆びつき、やがて私は

甲斐甲斐しさと献身を忘れ去ってしまった。

そこにはあの人の好きな竜胆に、如雨露を傾ける平和だけが残った。

そしてあの人は軍に戻った。

陸の平穩に、私たちの比翼が飛べる空はなかった。

肌のひとつを白い包帯に覆われたあの人を見る。

私には、それが誰なのかわからなかった。

でも、とてもよく似合っている。

それはおそらく、軍服の色と同じで、それが戦場にしかないものだからだろう。だから、あの人には包帯がよく似合う。

そして、私は包帯に覆われた人が誰なのか、わからない。

視界の端できらり、と翔鶴の薬指が光る。

あの人の包帯を巻きなおす、やさしい手つき。

包帯を巻きなおし、翔鶴は私をまっすぐ見つめる。

その瞳は赤く燃えさかっていた。

「その先にあるのは破滅よ」

私は翔鶴に短く告げる。

「構いません。鶴は献身の鳥ですから」

私は翔鶴に背を向けた。

そして、あの人も。

二度と、私とその病室を訪れることはなかった。